

KEWPIE SPECIAL
サントリーホール
ニューイヤー・コンサート 2016
ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団
“美しく青きドナウ”

KEWPIE SPECIAL
Suntory Hall
New Year Concert 2016
Symphonic-Orchester der Volksoper Wien
“An der schönen blauen Donau”

2016年1月1日(金・祝)・2日(土)・3日(日) 14:00開演
サントリーホール 大ホール
Friday, January 1, Saturday, January 2, Sunday, January 3, 2016 at 14:00
Suntory Hall, Main Hall
主催：サントリーホール

2016年1月4日(月) 14:00開演
ミューザ川崎シンフォニーホール
Monday, January 4, 2016 at 14:00
Muza Kawasaki Symphony Hall
主催：ミューザ川崎シンフォニーホール、サントリーホール
協力：神奈川芸術協会

ソプラノ：アンネッテ・ダッシュ
Annette Dasch, soprano

テノール：ミロ斯拉フ・ドヴォルスキー
Miroslav Dvorský, tenor

バリトン：ダニエル・シュムッツハルト
Daniel Schmutzhard, baritone

指揮：グイド・マンクージ
Guido Mancusi, conductor

管弦楽：ウィーン・フォルクスオーバー交響楽団
Symphonie-Orchester der Volksoper Wien

舞踏：バレエ・アンサンブル SVO ウィーン
Ballett Ensemble SVO Wien, dance

協賛：キュービー株式会社

後援：オーストリア大使館、ウィーン在日代表部、ウィーン市観光局

制作：サントリーホール

スッペ：オペレッタ『ウィーンの朝、昼、晩』序曲
Franz von Suppé: Ein Morgen, ein Mittag und ein Abend in Wien, Ouvertüre

ヨハン・シュトラウス I：カチューチャ・ギャロップ op. 97 ★
Johann Strauss I: Cachucha-Galopp, op. 97

レハール：オペレッタ『メリー・ウイドウ』からダニロ登場の歌「おお祖国よ」♣
Franz Lehár: "O Vaterland, du machst bei Tag", Die Lustige Witwe

レハール：『ジューディッタ』から「私の唇は熱いキスをする」♥
Franz Lehár: "Meine Lippen, sie küssen so heiß", Giuditta

イヴァノヴィチ：ワルツ『ドナウ川のさざなみ』★
Iosif Ivanovici: Donauwellen, Walzer

カールマン：オペレッタ『マリッツァ伯爵家令嬢』から「来い！ジブシーよ」♣
Emmerich Kálmán: "Komm Zigan", Gräfin Mariza

ヴァルトトイフェル：スケーターズ・ワルツ op. 183
Émile Waldteufel: Les patineurs, op. 183

ロンビ：コペンハーゲンの蒸気機関車ギャロップ
Hans Christian Lumbye: Kopenhagener Eisenbahn Dampf Galopp

ヨハン・シュトラウス I：ため息のギャロップ op. 9
Johann Strauss I: Seufzer-Galopp, op. 9

— 休憩 —
intermission

ヨハン・シュトラウスⅡ：オペレッタ「くるまば草」序曲
Johann Strauss II: Waldmeister, Overture

カールマン：オペレッタ「マリツァ伯爵家令嬢」から二重唱「ハイと言って」♥♣
Emmerich Kálmán: "Sag' ja", Gräfin Mariza

マンクージ：さくらワルツ ★
Guido Mancusi: Sakura-Walzer

シュランメル：ウィーンはいつもウィーン
Johann Schrammel: Wien bleibt Wien

ヨハン・シュトラウスⅡ：オペレッタ「こうもり」から
三重唱「私は、不安でいっぱい！」♥♣♣
Johann Strauss II: "Ich stehe voll Zagen", Die Fledermaus

ヨハン・シュトラウスⅡ：ワルツ「美しく青きドナウ」op. 314 ★
Johann Strauss II: An der schönen blauen Donau, Walzer, op. 314

♥アンネッテ・ダッシュ

♣ミロ斯拉フ・ドヴォルスキー

♣ダニエル・シュムッツハルト

★バレエ・アンサンブル SVO ウィーン



■ソプラノ アンネッテ・ダッシュ

Annette Dasch, soprano

アンネッテ・ダッシュはミュンヘン音楽大学にてヨゼフ・ロイブルの薫陶を受け、現在世界の第一線で活躍するソプラノの一人である。これまでに、メトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ザルツブルク復活祭音楽祭、ドレスデン歌劇場、パリ・オペラ座、フィレンツェ歌劇場、新国立劇場、王立モネ劇場、パイロイト音楽祭等に出演し、ロンドン交響楽団、パリ管弦楽団、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、スイス・ロマンド管弦楽団といった名だたるオーケストラと共演。ラトル、バレンボイム、小澤征爾、アーノンクール、ティーレマン、C. デイヴィス、ドゥダメル、ケント・ナガノ、ネルソンス等著名な指揮者と共演している。ソニー、BMGと専属契約を結んでおり、デビュー CD『アルミーダ』は2008年にエコー賞のオペラ・アリア部門を受賞した。モーツァルトのアリアを収録したセカンド・アルバムも同じくソニーより発売されている。



■テノール ミロスラフ・ドヴォルスキー

Miroslav Dvorský, tenor

1960年生まれ。プラティスラヴァ音楽院で学ぶ。83年スロヴァキア国立歌劇場で『愛の妙薬』のネモリーノ役を歌ってデビュー、以後ウィーン国立歌劇場、ハンブルク州立オペラ、ドレスデン歌劇場、ハノーファー・ニーダーザクセン州立劇場などで活躍。コンサートでもウィーン響、スロヴァキア・フィルなどと共演。92年以降ウィーン・フォルクスオーパー響ソリストとして来日し、オペレッタ・フェスティバルにも出演するなど、たびたび来日している。最近では、プラティスラヴァ歌劇場を本拠地に『トスカ』や『こうもり』『カルメン』『イエス・ファ』『ルサルカ』『ローエングリン』などに出演、その存在感を遺憾なく発揮している。ナクソス、オーバス、スプリフォンなどのレーベルでレコーディングのほか、ラジオ、テレビ用の録音も数多く行っている。



■バリトン ダニエル・シュムッツハルト

Daniel Schmutzhard, baritone

ウィーン国立音楽大学で研鑽を積み、ウィーン・フォルクスオーパーで活躍した後、フランクフルト歌劇場との専属契約を交わした。2014/15年シーズンは、ウィーン・フィルとの公演やベルリンのフィルハーモニーホールでハイドンの『四季』の公演を行い、マーラーの『リュッケルトの詩による歌曲』と、ハイドンの『天地創造』でフランス国立リル管弦楽団と共演している。また、フランクフルト歌劇場では、『ボエム』のマルチェット役、『ファルスタッフ』のフォード役、『ナクソス島のアリアドネ』のハルレキン役、『魔笛』のババゲーノ役、『ドン・ジョヴァンニ』のタイトルロール等を歌い、アントワープ歌劇場、アン・デア・ウィーン劇場、パイロイト祝祭歌劇場へ出演した。これまでに、指揮者のダニエル・バレンボイム、サイモン・ラトル、フランツ・ウェルザー＝メスト、レオポルド・ハーガー、ウルフ・シルマーなどと共演しており、さらなる活躍が期待される逸材である。



■指揮 **グイド・マンクージ**
Guido Mancusi, conductor

1998～2002年、シェーンブルン宮殿室内管弦楽団首席指揮者、2000～02年、ウィーン・トーンキュンストラ管弦楽団副指揮者。これまでにウィーン芸術週間や「クラングボーゲン」、ロンドン古楽コンソートなどに客演し、ウィーン室内歌劇場、ウィーン・シヤウシュピールハウス、クラーゲンフルト劇場、エアフルト歌劇場などでプレミエを指揮している。2002年クラーゲンフルト劇場の首席指揮者に就任。作曲家としても高く評価されている。



■管弦楽 **ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団**
Symphonie-Orchester der Volksoper Wien

ウィーン・フィルと並び世界最高のウィンナ・ワルツ、ポルカを聴かせてくれるこの楽団は、ウィーンを代表するオペラ、オペレッタハウスとして1898年に皇帝フランツ・ヨーゼフ即位50年を記念して創設されたウィーン・フォルクスオーパー（国民劇場）のオーケストラ・メンバーにより結成。毎年、お正月の日本にウィーンの薫りを届けてくれる。

■舞踏 **バレエ・アンサンブルSVOウィーン**
Ballett Ensemble SVO Wien, dance

2010年9月、ウィンナ・ワルツの研究と継承、および典型的なウィンナ・ダンスの保護を目的としてウィーン国立歌劇場とウィーン・フォルクスオーパーのバレエ・メンバーで結成されたバレエ・アンサンブル。選りすぐりの2組のペアが、サントリーホールのお正月のステージに華を添える。

Isa ICHIKAWA / Taina FERREIRA LUIZ / Martin WINTER / Dragos-Gabriel MUSAT

Symphonie-Orchester der Volksoper Wien

Konzertmeister

Anne Harvey-Nagl

Erste Violinen

Friedrich Walla

Michael Schierhuber

Clara Zmrzlik

Damir Oraščanin

Franz Pobenberger

Diane Stejskal

Marian Gaspar

Marjukka Kettunen

Eszter Augusztinovicz

Zweite Violinen

Ursula Greif

Ion Scripcaru

Karin Schlechta

Can Yafet

Melisa Yafet

Plamena Ivanova

Amora De Swardt

Katarina Dvorska

Viola

Roman Bisanz

Roman Trimmel

Farshid Girakhov

Lena Fankhauser-Campregher

Zoryana Antonyak

Cello

Ricardo Bru

Hannes Gradwohl

Kristaps Bergs

Georg Schwarz

Andrea Traxler

Kontrabass

Tomas Petöcz

Georgi Raoutzov

Benedikt Ziervogel

Andrea Mikulitsch

Flöte

Renate Linortner

Teresa Pickave

Oboe

Josef Bednarik

Peter Mayrhofer

Klarinette

Thomas Lukschander

Barbara Brunner

Fagott

Maximilian Feyertag

Michael Zottl

Horn

Herbert Penzinger

Francisco Supin

Thomas Steinwender

Erich Saufnauer

Trompete

Christof Zellhofer

Andreas Trauner

Posaune

Andreas Pfeiler

Peter Gallaun

Stefan Gottwald

Pauke

Sebastian Brugner

Schlagwerk

Dominic Feichtinger

Johannes Schneider

Lucas Salaun

Harfe

Mariagrazia Pistan-Zand

スッペ：オペレッタ「ウィーンの朝、昼、晩」序曲

フランツ・フォン・スッペ (1819 ~ 95) はダルマチア (バルカン半島西部、アドリア海に面した地方) に生まれ、ウィーンで活躍したオペレッタ作曲家。オッフエンバックのバリ・オペレッタの影響を受けて、1840年代から数々のオペレッタを書き、ウィーン・オペレッタの基礎を築いた。『ウィーンの朝、昼、晩』はスッペの初期のオペレッタのひとつだが、現在ではその序曲だけが知られている。曲はファンファーレのような導入部から甘美なチェロの独奏をはさんで速い部分に入り、ぐんぐん盛り上がり華々しく終わる。

ヨハン・シュトラウスⅠ：カチューチャ・ギャロップ op. 97

ヨハン・シュトラウスⅠ世 (1804 ~ 49) は「ワルツ王」ヨハン・シュトラウスⅡ世 (1825 ~ 99) の父。「ワルツの父」とも呼ばれる人で250曲を超えるワルツやポルカ、ギャロップなどを作曲したが、こんにちあの有名な「ラデツキー行進曲」以外はあまり演奏される機会に恵まれていない。この「カチューチャ・ギャロップ」は、1837年8月にウィーンでの舞踏会で初演された曲。「カチューシャ」はロシアの女性の名前エカテリーナの愛称名で、日本ではロシア民謡の愛唱歌のタイトルとして知られるが、この曲の「カチューチャ」はスペイン南部アンダルシア地方の民族舞師のことで、多くの場合女性がカスタネットを鳴らしながらソロで踊る。1836年、ウィーン出身のパレエ・ダンサーとして人気の高かったファニー・エルスラー (1810 ~ 84) がパリで「カチューチャ」を踊って大評判となり、翌年彼女が故郷のウィーンでこれを踊ると、ウィーンの人々は熱狂し、一大「カチューチャ・ブーム」が巻き起こった。これに目をつけたシュトラウスⅠ世は、もとの舞曲の一部を取り入れたこのギャロップを大急ぎで作曲し、舞踏会が始まる1時間前にギリギリで完成させたという。2011年のウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサート(ウエルザー=メスト指揮)でも演奏されている。

レハール：オペレッタ「メリー・ウイドウ」から ダニロ登場の歌「おお祖国よ」

オペレッタの《黄金時代》を代表するのが名作「こうもり」その他を作曲したヨハン・シュトラウスⅡ世なのに対して、ハンガリーに生まれ、ウィーンとベルリンを中心に活躍したフランツ・レハール (1870 ~ 1948) は、オペレッタの《白銀時代》を代表する作曲家。そのレハールの最高傑作が「メリー・ウイドウ」(1905年ウィーン初演)だ。ベル・エポックのバリを舞台に、莫大な遺産を相続した陽気な未亡人ハンナと洒落者の公使館員ダニロのひと筋縄で

はいかないハラハラ・ドキドキのラヴ・ロマンスがくり広げられる。第1幕で歌われる「おお祖国よ」・別名「マキシムの歌」は、行きつけのキャバレー《マキシム》から公使館に帰ってきたダニロが、ゴキゲンな一杯気分で歌う登場の歌。公使館でのデスクワークなんて退屈でやってられない、夜は美女たちが迎えてくれる《マキシム》で心ゆくまで楽しむのさ、と遊興三昧の公使館員生活を歌う。「祖国のための仕事は疲れるよ。だから夜はしっかり骨休めさ。《マキシム》に行けば、旨いシャンパンと美女たちのカンカン踊りが、祖国のことなんか忘れさせてくれるんだ……」（歌詞は大意。以下同様）

レハール：「ジュディッタ」から「私の唇は熱いキスをする」

「オベレッタ」ではなく「音楽喜劇」と銘打たれた「ジュディッタ」は、レハール最後の舞台作品。1934年、作曲者の長年の念願かなって（オベレッタ劇場ではない）ウィーン国立歌劇場で初演された。地中海沿岸地方を舞台に、陸軍大尉オクターヴィオと人妻ジュディッタとの運命的な、しかし結局は実ることなく終わった愛の物語が展開する。カルメンのように情熱的な女ジュディッタは、男前の陸軍大尉オクターヴィオにひと目惚れし、実直な職人の夫を捨てて大尉とともにアフリカに行くが、二人の愛の生活は長続きしない。オクターヴィオが出征したために彼と別れたあと、北アフリカの町のナイトクラブで歌手となったジュディッタは、この地でまた新しい男と恋仲になる。「私の唇は熱いキスをする」は、ジュディッタがナイトクラブで客たちに歌って聞かせる歌。ヴァンプ（妖婦）のように男たちを惹き付けずにはおかない恋多き「私」のことを歌う。「自分でもわからないの。なぜみんな私に近づいて、私の瞳を見つめ、愛を語るのかが……私の唇は熱いキスをする。私の足は柔らかで白い。私の星座にはこう書かれているの。おまえはキスをし、愛する運命なのだ！……」

イヴァノヴィチ：ワルツ「ドナウ川のさざなみ」

ヨシフ・イヴァノヴィチ（1845～1902）はルーマニアのティミショアラ出身の作曲家・指揮者。若いころから軍楽隊に加わり、やがて軍楽隊長をしながらおよそ350曲のワルツや行進曲を作曲した。人気はヨーロッパ諸国におよび、1889年のパリ万国博では記念行進曲作曲コンテストに応募し、116の応募作品のなかから選ばれて作曲賞を受賞している。こんにちではイヴァノヴィチの作品のほとんどは忘れられ、広く知られていて演奏もされるのは1880年に作曲されたこの『ドナウ川のさざなみ』だけとっていい。おなじドナウ川関連のワルツの曲でも、優美で明るいワルツ王シュトラウスの「美しく青きドナウ」と比べると、哀愁味あふれる短調とダイナミックな長調の交錯するイヴァノヴィチのこの曲は、いかに東欧風なところが魅力的だ。マレーネ・ディートリヒ主演のアメリカ映画『間諜X27』（1931年）のなかで、彼女がアップライト・ピアノで弾いて聴かせたのもこの曲。日本でも人気の高い曲で、以前はサーカスの呼び込みの音楽としてさかんに拡声器から流されていたりもしたから、耳に覚

えのある方も多いのではないだろうか。

カールマン：オペレッタ「マリツツァ伯爵家令嬢」から「来い！ジブシーよ」

エメリヒ・カールマン(1882～1953)は、レハールより少し後の世代のハンガリー出身のオペレッタ作曲家。彼の作品で「チャールダーシュの女王」と並ぶ傑作が「マリツツァ伯爵家令嬢」だ。初演は1924年、ウィーンの《アン・デア・ウィーン劇場》。ハンガリーに広大な農園を持つマリツツァ伯爵家令嬢と、そこで管理人として働く没落貴族タシロとの紆余曲折に満ちた恋物語が展開する。哀愁と情熱のハンガリー色濃厚な曲、ウィーン風の優雅なワルツ、それにシミーやフォックストロットなど1920年代の新しいリズムの曲などが絶妙に配合された、すこぶる魅力的なオペレッタだ。「来い！ジブシーよ」は、第1幕で男性主人公のタシロが、マリツツァ伯爵家令嬢のパーティーに参集したジブシーの楽師たちを前にして歌う人気曲。かつては裕福なウィーンの貴族として贅沢な暮らしをしていたが、いまでは落ちぶれてハンガリーの農場の管理人をしているわが身を思い、タシロはやるせない思いをジブシーたちにぶつける。零落の身を嘆く哀感あふれる前半部分のあと、「来い！ジブシーよ」で始まる後半になると気合いがこもって曲は次第に盛り上がり、最後は急速なチャールダーシュ(ハンガリーの民族舞踊)へとなだれ込む。「かつては私も粋な“チャールダーシュの騎士。”と呼ばれたものだった。ジブシーの楽師たちに演奏させて気前よくカネをばらまき、シャンパンを次々に空けて夜通し踊ったものだった。しかし、そんな贅沢な暮らしも長続きはしないのだ……来い！ジブシーの楽師たちよ！さあ、きみらの音楽を聴かせてくれ！とびきりの演奏で、私の心を盛り立ててくれ！……」

ヴァルトトイフェル：スケーターズ・ワルツ op. 183

エミール・ヴァルトトイフェル(1837～1915)はフランスのアルザス地方の町ストラスブール出身の作曲家。父はオーケストラ指揮者、兄はヴァイオリニストという音楽一家に生まれ、パリに出てピアニスト・作曲家となった。作品にはワルツの曲が多く、19世紀後半のフランスを代表するワルツ作曲家として、フランスのみならずイギリスなどでも活発な演奏活動を行った。1882年に作曲された「スケーターズ・ワルツ」は、ヴァルトトイフェルの代表作のひとつ。冬に氷結したセース川やブローニュの森の池でスケートを楽しむ人々の様子からインスピレーションを得て書かれた。導入部冒頭での上下するグリッサンド(滑音)のバッセージ、鈴の音など、冬の日にスケートをする人々の様子をほうふつとさせるものがある。

ロンビ：コペンハーゲンの蒸気機関車ギャロップ

ハンス・クリスティアン・ロンビ(1810～74)は、コペンハーゲンに生まれたデンマークの作曲家。ヴァイオリンやトランペットの奏者として音楽活動をしたあと、1839年、ランナーや

シュトラウスⅠ世のワルツを演奏するウィーンの楽団の巡業公演を聴いて大きな影響を受け、以後ワルツやポルカ、マズルカやギャロップ、行進曲などを次々に作曲、やがて「北国のヨハン・シュトラウス」とも呼ばれるようになった。1843年から1872年までコペンハーゲンのチボリ公園楽団長ならびに専属作曲家。デンマーク国内での人気は非常に高く、コペンハーゲンの人々はロンビを鼠耳にするあまり、逆にヨハン・シュトラウスⅡ世のことを「南のロンビ」と呼ぶほどだった。『コペンハーゲンの蒸気機関車ギャロップ』は、1847年、コペンハーゲンとその西方の古都ロスキレを結ぶ鉄道が開通したことを祝って書かれた曲で、ロンビの代表作のひとつ。当時はヨーロッパ各国で鉄道の開通が急速に進み、技術革新の象徴として受け止められた時代で、ウィーンのシュトラウス・ファミリーの作曲家たちをはじめ多くの作曲家たちが鉄道を題材にした曲を書いている。ロンビの曲では、静かな導入に始まり、やがて蒸気機関車がゆっくりと動き始め、汽笛や蒸気の音を交えながらスピードを上げ、快走したのちにふたたび停止するまでの様子が、音楽で巧みに描写されている。マリス・ヤンソンス指揮の2012年ウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサートで演奏されたことで、曲の知名度がかなり上がったようだ。

ヨハン・シュトラウスⅠ：ため息のギャロップ op. 9

1820年代から30年代にかけて、ウィーンではワルツのほかにも、速いテンポで踊るギャロップが大流行した。1828年に出版された「ため息のギャロップ」は、シュトラウスⅠ世が書いた多くのギャロップの曲のひとつ。ギャロップの場合、舞踏会場のなかを多くの踊り手たちが列になり、猛烈なスピードで踊りまくるため、みな消耗して息切れがする。それが「ため息」というわけだ。2分足らずであっという間に終わるハイスピードの曲のコーダ(終結部)のまゝに、四分音符で半音ずつデミヌエンド(だんだん弱く)しながら下降する4小節があり、これが「ため息」ということのようなのだ。

ヨハン・シュトラウスⅡ：オペレッタ『くるまば草』序曲

題名の「くるまば草」は、茎から車輪のような葉が出ることからそう呼ばれる森の草花で、ドイツではリキュールの材料としても使われる。シュトラウスⅡ世70歳の1895年に〈アン・デア・ウィーン劇場〉で初演されたこのオペレッタは、ドイツ中東部ザクセン地方のいなかを舞台に、森で林業に従事する人々や役人、植物学の教授、ドレスデン歌劇場のソプラノ歌手といった人物たちが登場し、変装と取り違えの恋愛喜劇をくりひろげるもの。初演当時はそこそこの人気を博したというが、このオペレッタがこんろにち舞台にかかることはほとんどない。しかしその序曲は、ぜひ一度舞台上演で見たいと思わせるような、変化に富む楽しい曲だ。

カールマン：オペレッタ「マリッツァ伯爵家令嬢」から 二重唱「ハイと言って」

カールマン作曲「マリッツァ伯爵家令嬢」第2幕、このオペレッタのメイン・カップルであるタシロとマリッツァによって歌われる愛の二重唱。伯爵家令嬢であるマリッツァと、本来は貴族とはいえ今では落ちぶれてマリッツァの大農場の管理人をしているタシロとの間には、越えがたい身分の差がある（マリッツァはこの時点では、まだ、タシロがもとは貴族であることを知らない）。しかし二人は次第に心惹かれ合うようになり、心を開いて語り合ううちに、熱い恋心を歌うこの甘美なワルツの二重唱となる。「(タシロ) 私の大切な人！ どうか今晚、あなたの素敵な服を着て、門の前で待っていてください。私はあなたをしっかりと抱きしめて、おとぎの国へお連れしましょう……どうぞ、ハイと言ってください！……」 「(マリッツァ) 愛にあふれた心で私は参りましょう。あなたの腕のなかで、あなたに熱く見つめられる幸せ！……どうぞ、ハイと言ってください！……」

マンクージ：さくらワルツ

『さくらワルツ』は、東日本大震災で親を失った子どもたちのためにUNICEFの協力で作曲され、これらの子どもたちと多くの犠牲者を出した全ての日本人のために捧げられました。ワルツの中には「さくら」の歌のテーマが使われていて、すでに前奏から極東風の音楽にそのテーマが潜んでいますが、ワルツが進むにつれて、ウィーン風と日本風の音楽が混ざり合っ出てきます。そしてこの作品は、一人のヨーロッパ人がどのようにこの国を全体として見ているかにも焦点が当てられています。

少し夢見るように、豊かな文化そして強い意志が感じられ、それは希望をもたらします。この国を訪れることが大好きな一人の音楽家の日本への感謝でもあります。

【グイド・マンクージ 松田暁子 訳】

シュランメル：ウィーンはいつもウィーン

ヨハン・シュランメル(1850～93)は19世紀後半のウィーンで活躍した作曲家・ヴァイオリニスト。父はクラリネット奏者、母は歌手という音楽一家に生まれ、10歳くらいからウィーンの酒場や飲食店などでヴァイオリンを弾くようになった。1870年代後半から、弟のヨーゼフ・シュランメルのヴァイオリン、それにコントラギターを加えて楽団を組み、本格的な演奏活動を開始。やがてこれにクラリネットも加えて「シュランメル四重奏団」とし、兄弟が作曲した200曲を超えるワルツやポルカ、マーチなどの小品を、ホイリゲ(ウィーン郊外のワイン酒場)や飲食店、旅館などで演奏して大きな人気を博した。『ウィーンはいつもウィーン』は兄ヨハンの作曲した代表作。曲の中間部トリオの部分は、同じくヨハンが作曲した歌詞付きの別の3拍子の歌「生粋のウィーン子の心」の旋律を2拍子に変えて取り入れたもので、「ウィーンはいつもウィーン」という曲のタイトルは、「ウィーン子は酒と歌を愛し、ワルツを踊り、いつもユ-

モアの心を忘れない……」と歌うこの歌の歌詞の内容に由来する。ウィーン子による手放しのウィーン賛美の曲として知られ、こんにちではウィーンという都市の宣伝歌といってもいいが、「ウィーンはいつもウィーン」という言葉は、どうやっても変わりようのないウィーンの保守性をからかったり批判したりする際に使われる決まり文句でもある。

ヨハン・シュトラウスⅡ：オペレッタ「こうもり」から 三重唱「私は、不安でいっぱい！」

ヨハン・シュトラウスⅡ世作曲の「こうもり」(1874年初演)は、あらゆるウィーン・オペレッタの中の最高傑作。「大都市近郊の温泉保養地」を舞台に、倦怠期にあるらしい夫婦、夫の悪友、ドジな弁護士、女好きの音楽教師、刑務所長、ロシアの大金持ち、酒飲みの看守などがスツクモンダをくり広げる。豪華な仮面舞踏会(第2幕)とその前後からなるストーリーも面白いし、シュトラウスの音楽はまさに天下一品だ。「私は、不安でいっぱい！」は、仮面舞踏会の翌朝の刑務所という設定の第3幕でくり広げられる愉快的場面の三重唱。前夜のアヴァンチュールが露見することを恐れるロザリンデ、その彼女の相手で同じく露見を恐れる音楽教師アルフレート、それに、弁護士になりすまして彼らから事の次第を聴きだそうとするロザリンデの夫アイゼンシュタインの3人が、それぞれの胸のうちを歌う。アイゼンシュタインは、妻とアルフレートが違い引きをしたらしいことを知って怒り狂うが、舞踏会で仮面をつけた妻をそうとは知らずに口説いたことをロザリンデに暴露され、ぐうの音も出なくなる。「(ロザリンデ)私は不安でいっぱい。知られたくないこともあるし……」「(アルフレート)事情はぜんぶ打ち明けよう。そうすりゃ助けてもらえるよ……」「(アイゼンシュタイン)きびしく追求したならば、二人は1を割らんかも……」

ヨハン・シュトラウスⅡ：ワルツ「美しく青きドナウ」op. 314

正式の国歌よりもよほどよく知られた〈第2のオーストリア国歌〉とも呼ばれるこの〈ワルツの中のワルツ〉は、1867年2月にまず男声合唱団のための合唱曲として〈ディアナ・ザール〉で初演され、その1ヶ月後、大がかりなコードが書き加えられたオーケストラ曲として、フォルクスガルテン(国民公園)で初演された。ゆったりと始まる曲の雰囲気は、まさにドナウ川のイメージにぴったりだが、合唱曲の初演時の歌詞はカーニヴァルの景気付けのような内容で、ドナウ川とは無関係だったというのが面白い。

音符が踊る、心が踊る。



美しい音色が連なって心踊るメロディが生まれるように、キューピーも一瞬一瞬のおいしさを大切に、心豊かな食の世界をおとどけます。

愛は食卓にある。

キューピー 

